

③今後、疾患の高齢化と長期の免疫調節薬使用により、新しい合併症の問題の出現が危惧される。

## 6 術後 Crohn 病に対する infliximab 使用例の検討

横山 純二・河内 裕介・本田 稔  
鈴木 健司・青柳 豊・小林 正明\*  
成澤林太郎\*・飯合 恒夫\*\*・畠山 勝義\*\*  
新潟大学医歯学総合研究科消化器  
内科学分野  
新潟大学医歯学総合病院光学医療  
診療部\*  
新潟大学医歯学総合研究科消化器・  
一般外科学分野\*\*

【目的と対象】 Crohn 病は経過中消化管の狭窄や瘻孔、膿瘍形成により、多くの例で手術を余儀なくされるが、術後の再燃による再手術が必要となる場合も高頻度で見られる。術後の再燃・再手術の予防は患者の QOL の面において極めて重要であるが、これまで明確なエビデンスをもった術

後療法はなかった。今回、当科にて術後 Crohn 病症例に対し infliximab を使用した 14 症例を検討し、術後再発の予防、寛解維持に対する有効性について考察した。

【結果】 術後 1 年間の経過では、早期の infliximab 使用例における臨床的・内視鏡的寛解の維持効果が、非使用例に比べ明らかに優れていた。また、術後の再発例に対しても臨床的・内視鏡的寛解導入および寛解維持に対する有効性が認められた。

【考察】 infliximab の使用により、Crohn 病術後の再手術率の低下、長期予後の改善が期待できる。今後、長期的な成績の集積が必要である。

## Ⅲ. 特別講演

IBD の長期予後を規定する因子とその改善に向けて

兵庫医科大学  
内科学下部消化管科 主任教授

松本 譽之